

山内舜雄著 『禪と天台止観——坐禅儀と『天台小止観』との比較研究』（大蔵出版）

池田魯参

山内舜雄先生は、先の『天台本覚法門と道元禅』（大蔵出版）の刊行に続いて、此の度は、『禪と天台止観——坐禅儀と『天台小止観』との比較研究——』と題する、九百頁を越す大著を上梓された。

本書は、先生が昭和四十三年に学位請求論文として提出された『禅思想史より見たる天台止観の研究』を骨子に、新たに近年のいくつかの研究を附している。その辺のことは序文に詳しい。

この序文も、学位論文に付したものをそのまま遺し転載したというところであるが、孜孜として止むことがなかった、先生の天台研究の来し方が回顧され、感懐も一入である。

次に続けて『正法眼蔵御聞書抄』に関する研究を書き下ろされ、今春すでに入稿も終わったと伺っている。間もなく本書を超える大冊が刊行される予定である。今から出来映えが楽しみである。

学問は日々の蓄積以外にないとは、よく耳にする言葉であるが、それにしてもこの短期間のうちに、堰を切ったように次から次と大著を刊行される、先生の情熱と、課題の究明に持続された集中力には、日頃、先生の身近でごようすを拝見しているものの一人として、正に感嘆の一語に尽きる。

いささか本書の紹介をかねて、読後感を述べさせて頂き、本書の刊行にはらわれた先生の御労苦の一端にゆえたい。

書の全体の構想を把握するには、目次を読むのが、一番手取り早く、また確実であるから先ず、本書の目次を掲げておこう。

序論 問題の所在

本論 第一部 天台止観とその実修

序章 天台教学における禅宗批判

第一章 天台止観の構格とその成立過程

第一節 三種観門について

第二節 三種止観について

第三節 『次第禅門』の成立とその構成

第四節 『六妙門』の地位とその内容

第五節 『摩訶止観』の組織とその不説分

第二章 止観の実修とその吟味

第一節 四種三昧について

第二節 二十五方便の性格

第三節 止観正修（一）——十境について——

第四節 止観正修（二）——十乘観法について——

本論 第二部 『天台小止観』における坐禅——その実践形態——

序章 『天台小止観』と坐禅儀対比の意義

第一節 『天台小止観』とその註釈について

第二節 『天台小止観』の構成について

第三節 序文について

第一章 具縁第一

第二章 呵欲第二

第三章 棄蓋第三

第四章 調和第四

第五章 方便行第五

第六章 正修行第六

第七章 善根発相第七

第八章 覚知魔事第八

第九章 治病患第九

第十章 証果第十

本論 第三部 坐禅儀と『天台小止観』との比較研究

第一章 宗蹟の『坐禅儀』と『天台小止観』

第一節 坐禅儀の源流としての『天台小止観』

第二節 宗蹟の『坐禅儀』と『天台小止観』との比較研究（一）

第三節 宗蹟の『坐禅儀』と『天台小止観』との比較研究（二）

第四節 『普勸坐禅儀』と『天台小止観』との関係について

第五節 『天台小止観』の禅宗に対する特殊的地位

第二章 『普勸坐禅儀』と『天台小止観』

第一節 『普勸坐禅儀』天福本・流布本との対比の意義

第二節 『普勸坐禅儀』の構成とその性格

第三節 「夫参禅者」より「止念想観之測量」までの考察

第四節 「正坐之時」より「目須常開」まで——身儀に関する考察——

考察——

第五節 調息・調心についての比較

第六節 『正法眼蔵坐禅儀』との対比

第七節 『起信論義記』『起信論疏』『円覚経道場修証義』との関係

の關係

第八節 文章論からの考察

第三章 『坐禅用心記』と『天台小止観』

第一節 『坐禅用心記』の性格とその構成

第二節 構成上より見たる両者の連関性

一 『坐禅用心記』前半部分の考察

1 両者の構成的対比

2 『小止観』における坐禅儀の条件

3 両者の部分的対比

二 『坐禅用心記』中間部分の考察

三 『坐禅用心記』後半部分の考察

むすび

第三節 注釈上より見たる両者の親近性

附章 坐禅儀・坐法の注釈について

第一節 『禅林象器箋』における坐禅の註釈

第二節 『勅修百丈清規左牘』における坐禅儀の註解

第三節 『修禅要訣』における坐法

第四節 『興禅護国論』における坐禅儀と坐法

附論 第一部 中国天台に関する研究

第一章 天台智顛の宗教的実践とその伝記研究

- 第一節 天台智顛の宗教体験とその思想的展開―『六妙門』を中心としての一考察―
- 第二節 天台大師と煬帝―煬帝へのレジスタンスを中心として―

て―

第三節 伝記研究の基礎資料と『天台智者大師別伝』の成立

事情

- 第四節 『天台智者大師別伝』註釈の研究
 - 第五節 如海の『紀年録』における智顛出生年時の論証
 - 第六節 『天台智者大師別伝』の異本系統について
 - 第七節 『天台智者大師別伝』三本異本の比較対照
 - 第八節 『天台智者大師別伝』異本内容の研究
 - 第九節 堯如親王撰『智者大師別伝新解』について
 - 第十節 『国清百録』について
- 第二章 神智従義における禅宗批判
はじめに

- 一 湛然における禅宗批判
 - 二 神智従義における禅宗批判
 - 三 批判点への一考察
- 第三章 『止観義例纂要』における禅宗批判の考察
はじめに

- 一 『止観義例』における禅宗批判
- 二 『止観義例纂要』における禅宗批判
- 三 諸批判点の再吟味

『禅と天台止観』(池田)

附論 第二部 日本天台に関する研究

第一章 荣西的世界の再把握―天台の視座より見たる『興禅護

- 国論』の性格―
- はじめに

- 一 『興禅護国論』の選述について
- 二 『興禅護国論』に見える天台の性格

- 1 序文について
 - 2 第一令法久住門について
 - 3 第二鎮護国家門について
 - 4 第三世人決疑門について
 - 5 第四古徳誠証門について
 - 6 第五宗派血脈門について
 - 7 第六典拠増信門について
 - 8 第七大綱勸参門について
 - 9 第八建立支目門、その他について
- 第二章 『興禅護国論』(二十六問)と『弁道話』(十八問)との比較考察

- 第三章 荣西禅師の台密禅三宗兼学の立場について
- 第四章 荣西禅師の生涯とその人生観
はじめに
- 一 その生涯―伝記のあらすじ―

- 1 生い立ちとその出家
- 2 入宋求法―第一回―
- 3 入宋求法―第二回―
- 4 禅法弘宣―帰国以後

二 そのひととなりと生き方―思想と行動―

1 きびしい持戒持律者―持律第一葉上房

2 禪者榮西―『興禪護国論』―

3 道元の見た榮西―『正法眼蔵随聞記』にみえる榮西像

おわりに

第五章 洞門における本覚法門の理解とその批判―宇井伯寿著

『仏教汎論』を中心として―

第六章 宝地房証真著『天台真言二宗同異章』の考察とその達

磨宗批判

附論 第三部 「五時八教」論争をめぐる

第一章 関口真大「五時八教廃棄論」について

はじめに

一 問題提起の底に潜む歴史的課題

二 慧澄教学で代表

三 四明教学に成果

四 因襲的宗学研究に反省

五 「五時八教」の抹殺論

第二章 「經典成立史の立場と天台の教判」（佐藤泰舜）をめ

ぐる諸問題―関口真大博士の「五時教判論」との連関

において―

はじめに

一 「經典の取扱について」に見られる問題提起

二 「天台教判の要目」について

三 「智顛の頓漸五味説」について

1 「五時五味の説」について

2 「頓等の四教」について

3 「頓教」について

4 「漸教」について

5 「不定教」について

6 「秘密教」について

四 「機感としての頓漸五味説」について

五 「時代の機感による經典の成立」について

六 「教相判釈の立場」について

おわりに

第三章 「五時八教」論争の収束

あとがき

このように浩瀚な本書の全体にわたり、かつ問題の詳細を紹介することは、土台無理なことといわなければならぬ。幸い、「序論」の中で、本書の天台学研究を展開させ一貫させた問題の所在を述べておられるので、それに随って見るのが穏当であろう。

文章は、先生一流の息遣いが感じとれる表現で、誰れでも読み易いものとは決していえないものである。したがって、私の読みに誤りがなければ、大体次のように要約してよいかと思う。

まず、告白するように、本書は「禪宗の立場から天台止観を追究」したものである。決して、天台止観そのものを究明しようとするものではない。この大前提に立って、その実態を、坐法の観点を核に「天台止観と禪宗との具体的対比」に入る。その過程で、いよいよ「天台止観と道元禪」という課題が顕在化する。それはやがて「日本天台における本覚法門と道元禪の中心思想をなす本証妙修との連関」という魅力あるしかし困難な問題の究明へと向かうことに

なる。

先ずスタートは、「三大部とくにその実践部門である『摩訶止観』への研究を、禅宗の立場からこころみた」のである。「かくして、本論第一部、天台止観とその実修、の名の下に、第一章において天台止観の構格とその成立過程が論究され、第二章において止観実修とその内容の吟味がこころみられた」わけである。

天台止観の体系を、『次第禅門』『六妙門』『摩訶止観』から成る「三種止観」で把握し、『次第禅門』から『六妙門』へ、『六妙門』から『摩訶止観』へと、「智顛の禅観は微妙な内容上の発展を孕んで推移する」のであるが、その辺の推移を、本論第一部第一章で論及し、第二章では、『摩訶止観』の組織及び内容の批判、考察にかなりのウェイトをおいて精査されている。

勿論、「六朝禅観発達史における天台止観の地位を明確化する」とは、やはり止観解明の重要な鍵となるべきものと考えられる」のであり、問題の視野に入らなかつたわけではないのであるが、それらの点は、佐々木憲徳、佐藤哲英、水野弘元博士などの研究にゆずり、本書では、「歴史的研究はいちおう『次第禅門』にとどめて、これ以上遡及することはさし控えることとする」のである。専ら関心は禅宗の視点にあり、この辺の究明は次の課題に入るための準備段階のものといえよう。

ともかく「三種止観のみに目を奪われて、禅門部の諸撰述を見逃すことは許されない。ことに『六妙門』から『摩訶止観』へと大飛躍する間に、『修習止観坐禅法要』すなわち『天台小止観』が介在する」わけであり、『摩訶止観』では欠く、坐禅儀の記述が詳しい『天台小止観』の詳細な研究が、本論第二部で展開される。

本書が天台止観の研究に新境地を拓いた部分は、正しく第二部『天台小止観』における坐禅―その実践形態―と、第三部坐禅儀と『天台小止観』との比較研究にあるといえよう。

これから『天台小止観』を学ぼうとする人は、関口真大著『天台小止観の研究』（山喜房）や、『天台小止観』（岩波文庫）などと合せて、本書を座右に置かなければならないであろう。

殊に、第三部の『小止観』と諸種の坐禅儀との形態的比較は、本書の圧巻である。宗賾の『坐禅儀』、道元の『普勸坐禅儀』、瑩山の『坐禅用心記』などにおける坐禅の坐法と、『天台小止観』のそれとを精密に比較し、一々原文にもとづいて批評されている。

それはさらに『禅林象器箋』『勅修百丈清規左欄』『修禅要決』『興禅護国論』などの注釈書にまで及び、それぞれの坐法の記述に当って徹底的に検討を加えている。

それにしても、これらの研究をなぜ天台学研究からスタートしなければならなかつたのか、当然、生ずる疑問であり、反省である。「注意すべきは、天台禅門部からの展開とのみ禅宗をみてゆくことは、識らず知らずの間に天台的性格をもって禅宗を解釈する傾向が助長されてゆき、止観とは明確に区別さるべき祖師禅の立場が、はなはだ稀薄になる懼れがある、ということである」。

「そこで問題は、両者の歴史的交渉を追尋するよりも、止観の性格と禅宗との本質的相違を思想構造のうえから究明することの方が、より重要ではないか」と考えられる。「天台止観から、いわゆる禅宗に移るためには、止観そのものの構造自体を根底からかえてしまふような手続きを必要とする。一部の手直しだけでは済まされる問題ではない」と考えられるからである。「客観的理知を前提と

する天台の止観と、主体的実践から生れた禅体験とは、おのずから宗教構造をことにするといわねばならぬ」とまでいう。

先行する山口光円、関口真大両氏の研究成果を承け、天台側からなされた学説を吟味する過程ではつきりと問題の所在が確認されていく。「天台の立場からいかほど是認されようとも、禅宗の立場からは納得しえないものが生ずる」というような意見は、私にはいささか公式的にすぎ異論もあるところであるが、むしろ先生の本音の部分のように見える。それは同時に、禅宗側から無批判に発せられて来た、これまでの『天台小止観』に対する評価に対しても、極めて慎重な対応を迫ることになるのである。

あるいは「天台も趙宋以後になると、禅宗との論争上、宗密の教禅一致の立場を攻撃するあまり、次のような批難が宗密に集中されたのは笑止である」とし、また「禅宗は天台とは対立しても、華嚴とは融合しやすい性格をもっている。『圭峰修証義』の存在をより重視するならば、禅宗の坐禅儀は、むしろ華嚴の中で温められたのではないか、との推察も抱かされる。華嚴禅からの演繹の方が、洞門としては、より親しいものが期待できるようにも思う。ここから先の研究は、鎌田茂雄博士の御指教を受けることにしよう」（三七九頁）などの論及も、禅宗の立場から天台止観との接点を研究して来た本書にして初めて放たれた発言であるが、その当否は果して如何なものであろうか。

このように先生は天台止観の実践性を吟味していかれる中で、このような実践体系を確立した天台智顛その人にひかれていく。目次に従うとそうなるが、先生の研究の来し方からいうと、ここが最初期のものである。附論第一部、中国天台に関する研究、は、このよ

うな関心の下で、折々に発表された論文をまとめて収録している。

因みに、第三節、伝記研究の基礎資料と『天台智者大師別伝』の成立事情、は、最も早く『駒沢大学学報』復刊二号（昭和二八年三月）に発表された『天台智者大師別伝』並に註釈について』をもとにしている。第四節、『天台智者大師別伝』註釈の研究、は、『印度学仏教学研究』第四卷一号（昭和三十一年一月）に発表された、ほとんど同名の論文によっており、さらには、第二節、天台大師と煬帝―煬帝へのレジスタンスを中心として―、は、『台門学報』第四号（昭和三十三年三月）に掲載した、同名の論文にもとづいている。

「あとがき」の末尾に列記される初出論文リストを参照すると、この「中国天台に関する研究」は、先生が天台研究に手を染められた当初の発表論文によって構成されていることが知られる。

当初、先生の天台学への関心は、このようなところにこそあったのであらうと思われる。

ありようは極めてオーソドックスな研究態度といえ、これらの論文が、塚本善隆やレオン・ハーヴィッツの著名な研究成果と時代を同じくして列び出るのである。否、むしろ先生の研究がこの領域ではその当時も（今も）、学会を一步リードしていたらしいことは、塚本論文に明記するところである。

また脇道にそれるが、各研究誌のバックナンバーの若さは、戦後まもなく研究態勢をととのえつつあった研究機関と、続々と戦地から復学された諸先生方のありし日がしのばれる。先生も『駒沢に竹波打ちて』を刊行され、往時の駒沢大学を総括されつつ、学究の道に一步を進められた頃のことである。

第二章 神智従義における禅宗批判、第三章、『止観義例纂要』

における禅宗批判の考察は、それぞれ『印度学仏教学研究』一六巻一号（昭和四二年一二月）と、『駒沢大学仏教学部研究紀要』二六号（昭和四三年三月）に、相い継いで発表された同名の論文を収録している。因みに、私ごとを記して恐縮であるが、四四年四月に仏教学部の助手として採用された、その頃の御研究である。

この研究は、趙宗天台学の研究を大成された安藤俊雄博士の『天台思想史』外の研究で欠落していた面に照明をあてたもので、この辺の研究は今でもこれ以上のものはない。先見性があり、鋭い指摘である。

附論第二部、「日本天台に関する研究」は、天台と禅宗との、文字通り接点に立つ重要な人物である、米西の研究を、第一章～四章で究明している。本来は、学位請求論文の復論文として作成されたものであると伺っている。

第五章、洞門における本覚法門の理解とその批判―宇井伯寿著『仏教汎論』を中心として―は、先に刊行された『天台本覚法門と道元禅』の後に書かれた論考である。第六章、宝地房証真著『天台真言二宗同異章』の考察とその達磨宗批判、と合せて、本書の中では最も新しい研究成果といえる。

最近の先生の天台学研究が那邊にあるかを物語るであろう。

殊に、宇井博士の天台本覚法門の研究を正当に評価したのは、裕慈弘氏の道元研究を評価した業績と呼応するものといえ、正に先生の炯眼である。天台本覚法門の研究を通して発せられる、恩師の衛藤即応博士の宗学研究の不備に対する批判は、これからの曹洞宗学研究の出発点としなければならないところであろう。この辺の論調は切れ味も鋭い。

附論第三部、「五時八教」論争をめぐって、は、一昨年九月末に物故された故関口真大博士が晩年にいたって提起した「五時八教廃棄論」をめぐる批評である。関口説の真義はこれから改めて検討される必要があると私自身は考えている。

山内先生は「附論第三部は、関口真大博士によって提起された五時八教をめぐる論争に関するもので、著者の意とするところは、佐藤泰舜禅師の所説の敷衍にある」といわれる。

以上で、本書の全般にわたる紹介を終るが、本書が先生の学問研究における前半生の一里塚のような役割を荷負うことは確かである。多岐にわたる問題の所在は、そのことを物語るであろう。

最後に、本書を通読して感じた私の疑問を提示して、先生の教えを乞うものである。

たとえば、次のような言辞に出会う。

「天台禅門部については後に詳述するが、禅宗に直接影響をあたえたのは、止観部よりもむしろ禅門部であるといえる。『小止観』は止観の名はあるが『次第禅門』の要略であるから、もちろん禅門部に入れられる」（一九頁）とされる。この、禅門部、止観部の分類法は、伝教大師の将来目録の記述例にもとづいたもので、関口真大博士が注意したものである。本書はこれを承けて、「すると天台内部では、禅と止観との間には一線が画かれて、禅門部は止観成立の前階梯をなすが如くとり扱われていたようである。智者大師における禅観発達の推移をみれば、このようなとり扱い方はまことに妥当と考えられる。しかも、止観よりは一次元ひくい禅門部を禅宗と関係あるものとするのも、また理由あるものと考えられる。なんとならば、唯禅へと徹底した禅宗にとって天台止観へ近づきうる限界

は、おそらく禅門部に属する『小止観』が限度とみられるからである。とても教観双修の整備された『摩訶止観』まで遡ることはできない（二三頁）といわれる。このような経緯で、本書が「天台止観」の体系の中から、特に『天台小止観』を選定して、禅宗との比較対比の研究に入られたことが明らかにされている。

これと同様の論調は諸所にくり返し表われている。

「禅宗の立場からみるかぎり、大切なのは教相ではなくて、いうまでもなく止観であり、それも観念体系としての止観組織ではなく、観心そのものの実修過程である」（二〇頁）なども同趣意の気にならる表現である。

果してどうであろうか。関口真大博士の、天台止観は禅（次第禅門）から止観（円頓止観）へと究極の展開を遂げたものである、という、ほとんど定説化された学説にもたれかかりすぎてはいないだろうか。天台智顛は、晩年にいたって、それまで禅の観念の下で理解していたことを、止観の観念の下で体系化するようになった、ということとは事実その通りで誰れも疑うものではないが、それは一つの変化ではあるが、決して課題のすべてをいい表わしうるものではないと、私は考えている。

禅から止観へという関口説の底意を検討することなく、それを証拠だてる一助となった禅門部・止観部という分類法をそのまま借用して、本書の最も肝心な方向付けをされるのは、いささか安易にすぎないか、と直感されるのである。

最初の腰のすわりの悪さが、せつかくの研究に不透明な部分を残しているように思われる。たとえば、このような説もその一つである。

「いかにして天台止観が衰滅したかという、止観そのものの観念性、煩瑣性を衝く研究が、禅宗的視点からおこなわれねばならない。天台止観より禅を演繹するのではなくて、禅の立場からいかに止観がとり込まれたかという、禅思想形成過程における止観の役割というものが、改めて考察されてよいであろう。天台止観は、禅宗から観るかぎり、せいぜいその程度の役目しか果していない。学問体系として、あまりにすぐれているので、つい止観のおおきな傘の下に覆われるような錯覚におちいりやすいが、禅宗が止観をそれほど重要視しないことは明らかであり、絶対不可欠のものとも考えていない」（五〇頁）。「すると、二十五方便などが禅宗と関連があるといっても、厳密には『大智度論』まで遡及する必要を生じてくるであろう。天台止観に似ているからといって、単純に禅宗の起源を天台にのみ求めることはできない」（六四頁）。

しかし、少なくとも道元は修学時代の一時期、本気になって天台止観（『小止観』だけでなく『摩訶止観』も含む）を学んでいたことは『宝慶記』や後の著述の中に追尋することができるのであり、このように単純に割り切れないものがあることを想起しないではおれない。関口説のように、何でもかでも天台止観の影響であるかのような禅宗史研究も問題はあるが、このように、天台止観を過小に評価するのも問題であろうと考える。

例えば、教相より止観というような選択を一先ずおいて、止観を裏づける教相、教相にもとづく止観というような、教観相資の天台止観の原義にもう一度立ちかえって、禅宗との交渉を検討してみることが必要であると思われる。そういう場面で、『摩訶止観』の「観不思議境」の説と、道元の『正法眼蔵坐禅箴』の巻との教理学的研

究などが、新たに本質的課題として展開するのではなからうか。

本書を拝読しながら、私自身としては、もう一度、「真実、天台止観とは何か」と問うてみたくなった。

最後に、本書の中で私に頂戴した宿題については、いつの日にか必ず果たしたい心算であることを記しておきたい。

先生から頂いている日頃の御厚情に感謝申し上げます。筆を擱くものである。

(六二年七月一五日稿)